

めせたものに、帝國主義勢力の侵略がなかつたところであるだらうか。もきに引用した英文の結論を一般に承認させるためには、より後期の、帝國主義勢力が中國に果した役割を緻密に考察することが必要であらう。そしていのむつかしい仕事を、同治中興の研究に鋭利な洞察力を示したライト女史が、繼續してやられることが期待してやまない。

なおわたくしはわからぬが conservative あるまい

とばである。女史が同治中興をひいて保守主義といふのか、既存の儒教的社會秩序を維持しようとするが故に、これを保守主義と規定したようにも思えぬが、一・二頁の叙述および太平天國を社會革命といつてゐるかのぶる、太平天国の運動をフランス革命に對比し、それを壓殺し現政權を維持しようとする運動であるが故に、保守主義と呼んでゐるやうである。そうなれば會國藩や李鴻章を保守反動と呼ぶ口吻リストやマルキストの見解と同様にみえるのであるが、果してそののであらうか。わたくしには、太平天國の運動はフランス革命と對比されるよくな運動とは思えない、むしろ progressive も radical も liberal も呼ばれるよくなものとは考へられないが、女史の見解はさうなのであらうか。もし女史の見解がわたくしと同じであるならば、conservative program の比較研究のためには——それは女史

が本研究をやむ一つの目的であるが——同治中興は余りいい命題とはいえないよんだ點が、それよりむしろ、たゞ辛亥革命の方が適當ではなかろうか。

(お茶の水女子大學助教授)

E・C・カールソン「開平煤礦」

松村 順

Ellsworth C. Carlson : The Kaiping
Mines (1877-1912); Cambridge, Mass.,
Harvard University Press, 1957. 174 p.
28 × 11.5 cm

著者E・C・カールソン氏は、Oberlin College の歴史學の助教授で、本書は元來ハーバード大學における學位論文として提出されたものであるが、これを更に増補して、同大學のフェアバンク教授の主宰する、中國經濟・政治研究會の研究專刊シリーズの一冊として刊行されたものである。

本書は、現在もなお、中國の最も大規模な炭礦の一つである開灤炭礦の前身で、中國において最も早く西歐の近代的な機械をとり入れて採礦を始めた開平礦務局について、その創

立された一八七七年から、一九一二年に開灤礦務總局が設立されるに至るまでの三十五年間の状況を、近代中國經濟發展に關するケース・スタディとしてとりあげたものである。

全體は五章に分れ、第一章「開平企業の起源と初期の發展」においては、その創始にもつとも預つて力のあつた、時の直隸總督李鴻章と、その援護のもとに實際的な仕事に當つた招商局 China Merchant Steam Navigation Company 總辦の唐景星の兩者をクローズ・アップして、その經歷から當時の情勢を概説して、設立の經緯を述べている。

第二章「唐景星管理下における發展（一八八三—一九一）」においては、香港のミッショソ・スクールを出て、上海の海關、ついで外國汽船會社における極めて有能な賣辦として活躍したという經歷をもつ唐景星が、いわゆる官督商辦とよばれる特殊な機構の中で、政府の援助を背景としながらも、官營企業につきものの各種弊害を除いて、合理的、近代的な經營の上に、開平炭礦を發展させて行く状況を述べている。

第三章「張燕謀の管理（一八九二—一九〇〇）——外國資本依存の増加」においては、唐の死後その後を襲つた、醇親王家の寵臣といわれるが、極めて曖昧な経歷をもつ張燕謀の經營能力の缺除によつて、資金の不足を招き、次第に外國資本の導入が昂り、拳匪の亂を機として、外國支配下に入るま

での状況を述べたものである。

第四章「外國の支配」においては、一九〇〇年および一九〇一年における移交協定の經緯と、以後一九一一年に至るまでの外國支配下における發展の状況を述べている。

第五章「礦山回復に對する中國人の努力、開灤礦務總局」においては、開平炭礦の喪失によつて惹起された、中國の回復運動、それに伴う灤州礦務公司の設立と、それ以後の兩公司の激烈な競争、そして遂に力盡きて、一九一二年兩公司が合併され、開灤礦務總局が出來、完全に英國人の手中に歸する迄の經過を述べている。

結論として著者は、開平におけるこの近代企業は、その創設以後三十二年間に、著しい成功を收めたと述べ、次の六點をあげてある。即ち、西歐の近代的な採礦法を中國に導入したこと、中國の技術者に訓練と經驗の場を與え、次第に外國人技師と交替して行つたこと、重要な輸送の問題を解決し、これによつて中國の鐵道の發展を導いたこと、龐大な労働力を吸收し訓練したこと、石炭の生産高の增加に見合うように大市場組織を發展させたこと、西歐の近代技術を鑛業及び輸送に導入することに對する反対を克復したことである。しかし、このことは、開平の炭礦企業が、西歐と同じ發展を遂げたのではないこと、特に労働に關して西歐的生産方式に修正

が加えられたといふ、更に灤州礦務公司が、開平礦務公司を買収し得ずに却つて競争にやぶれた原因として、崩壊期の清朝政府といふ政治的な問題をあげ、開灤礦務總局の設立は止むを得ざる結果であつたとしている。

なお本書は、歐文の資料を豊富に引用し、實證的に考察を進めてゐるが、中國側の資料としては、中國近代經濟史資料叢刊の一冊として「帝國主義與開灤煤礦」が上海より一九五四年に刊行されてゐるので參照されると便利である。

(東洋文庫研究員)

A · C · マール 「キンサイ」

斯波義信

A. C. Moule: *Quinsai, with Other Notes on Marco Polo*, Cambridge, University Press, 1957. xii, 92 p. 9 illus. 28 × 22 cm.

去る一九五四年はマルコ・ポーロの生誕七百年に當り、「」教授との共著「集成本マルコ・ポーロ」 MARCO POLO; The Description of the World, Vols. I & II. 1938,

マルコ・ポーロ研究が一段と組織的に推進せられてゐる。「東方聞見録」が地理學史のみならず、東西兩洋の歴史研究にとって重要な資料である事は今更言うまでもないが、原本が夙に散佚し、流傳の諸系統の各種テキストが殘存している。

今日、その研究は自ら資料價值の確定の方向に努力が集中せられてゐる、その中でも大別して二つの動向を指摘する事が出来る。一は Benedetto, Moule &c Composite Text に代表される資料の古文書學的比較研究—複原の仕事であり、一は同時代の史實、文獻による資料の信憑度の決定—注釋である。前者においては各種テキストの收藏の分布状態を反映して、伊、佛、英など西歐學者のすぐれた業績の蓄積があり、後者については既に Yule の如き著名な注釋もあるが、文獻の豊富な東洋の學者の貢獻も高く評價される可きである。

今後所謂集成本を基礎に各種テキストの校合を経た上で文獻、史實による注釋が行われる事が望ましく、東西學者の協力を依つてマルコ・ポーロ研究が促進される事が期待られる。

A · C · マール「キンサイ」 斯波